

## 「日独伊三国同盟と第二次近衛内閣」メモ

- 日本が太平洋戦争に突入する運命は、昭和15年7月22日に成立した第二次近衛内閣で決まった▽9月27日、日独伊三国同盟を締結

独伊と手を握り英米に敵対的態度をはっきりさせる

▽日本はアメリカの経済圏に入ること、生存出来るという基本条件を忘れた

▽北部仏印に武力進駐南進の姿勢

▽開戦が止められなくなる布石近衛内閣成立の時点で、もう終わってしまった



初閣議を終えた近衛内閣閣僚  
(前列)近衛文麿首相(2列目から)松岡洋右外相(1人おいて)吉田善吾海相、東条英機陸相

- 支那事変以来、日本は状況判断の誤りの連続だった

▽陸軍が政治、外交の主導権情報不足

▽それ以上に、いつも希望的な観測、期待感が冷静であるべき判断の目を曇らせた

▽判断ミスの最たるものドイツ勝利を信じたこと

▽ドイツ電撃作戦に幻惑されるオランダ、ベルギーに続いてフランスも15年6月22日降伏

▽イギリス本土上陸作戦は間もなく行なわれ大英帝国は崩壊するだろう

- 外務大臣に起用した松岡洋右も大きな誤算

▽松岡は、ソ連を加えて四国の力で米に対抗

▽国際問題をパワー・ゲームとして処理しようとしたこと自体が間違い

▽松岡に二つの錯覚

ドイツ勝利だけでなく、独ソ不可侵条約で独ソの親密な関係が続くだろう

▽この前提が崩れれば、日本は対米戦争が避けられなくなる必然性

### 近衛 文麿(このゑ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。昭和8年貴族院議長。12年6月第一次内閣を組織、直後に勃発の支那事変で「国民政府ヲ对手トセス」と声明し、早期和平に失敗。枢密院議長を経て15年7月第二次内閣組閣。大政翼賛会を設立、日独伊三国同盟を締結するが、南部仏印進駐で対米関係を悪化させ、16年7月松岡洋右外相を更迭して第三次内閣を組閣。しかし日米交渉妥結の展望を失い10月総辞職。戦局が不利になった20年、戦争終結の上奏文を提出。戦後戦犯に指名され服毒自殺した

### 松岡 洋右(まつおか・ようすけ)

明治13(1880)～昭和21(1946)山口県生まれ。13歳で渡米、苦学してオレゴン州立法科大卒。明治37年外交官試験に合格し総領事まで昇進したが、大正10年退官。満鉄理事、副総裁を経て昭和5年政友会代議士。7年国際連盟日本代表となり、8年の満州国否認に抗議して退場した。10年満鉄総裁。内閣参議を経て15年近衛内閣外相。大東亜共栄圏の確立を提唱、日独伊三国同盟を締結。16年日ソ中立条約に調印。独ソ開戦後は対ソ開戦を唱え、対米関係では強硬姿勢を主張し、外相を更迭される。A級戦犯として起訴されたが、肺結核で病死

●「バスに乗り遅れるな」の大合唱が、米内光政内閣倒閣運動へ

▽独ソ不可侵条約以来、冷えていた対独感情を吹き飛ばした電撃的勝利

独ソ不可侵条約

ポーランド侵攻を考えていたドイツは、昭和14年1月、英仏を牽制するため日独防共協定を強化して、英仏も対象とした軍事同盟を結ぼうと日本に申し入れてきた。海軍と外務省は対米戦の恐れがあると強硬に反対したが、ドイツはこの交渉中に、背後を安全にするため8月23日、突然ソ連と不可侵条約を結んだ。

1週間後の9月1日、ドイツ軍はポーランドに進撃、第二次世界大戦が始まった。ソ連軍も東欧における両国の勢力範囲を画定した秘密議定書に基づきポーランドに侵入し、独ソでポーランドを分割した。

しかしこの条約は、「ソ連との間に一切の政治的条約を結ばない」という、日独防共協定に違反するドイツの重大な裏切りだった。

▽陸軍は「近衛内閣で三国同盟を結ぼう」

▽近衛の唱えている新体制運動も、ナチスのような一党組織を考えていた陸軍は歓迎

▽近衛が6月24日、枢密院議長を辞職すると、倒閣運動に拍車

●「南進」と「三国同盟」をセットに

▽参謀本部は7月4日、「時局処理要綱」陸軍案を海軍側に提示

「支那事変を解決すると共に、好機を捕捉して南方問題の解決に努める」

▽提案説明の作戦課長岡田重一大佐は重大な発言

「南方に武力を行使する場合には、独伊軍事同盟に入ることになる。強力な政治機構確立については、少数閣僚主義がよい。外相には松岡洋右の実力を買っている。陸相には東条英機か山下奉文がよかろう」

▽三国同盟に反対してきた米内が首相である限り、三国同盟も武力南進も出来ない

米内 光政(はなひ・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。連合艦隊司令長官を経て昭和12年海相。15年1月首相となり、親英米の方針から陸軍が進める日独伊三国同盟に一貫して反対、陸軍の協力が得られず7月総辞職。19年再び海相となり、戦争終結と海軍解体に当たる

…… 近衛の考えていた新体制運動 ……

「内閣従って国務は、統帥に操られる弱い造作に過ぎなかった。国民生活も、外交政策も、もはや国民の総意輿論とは全く離れたもの、軍部の意思、更に極言すれば、漠として捕捉し難い統帥の影によって、決定、修正、放棄せられるものであった。

…余自身むしろ支那事変拡大の責任を負うがため自己の中間的存在を放棄清算し、自ら国民輿論の後盾を得て軍部を抑制せんとする決意と希望を抱いていたのである。

…既成政党とは異った国民組織、全国民の間に根を張った組織と、その持つ政治力を背景とした政府が成立して、初めて軍部を抑え、日支事変を解決することができるとの結論に達し、これが組織化について研究することが、余が第一次内閣総辞職に際し、心に持った大きな希望であったし、第二次内閣組織の時の中心的希望であった」(「知れぬ艦」から)

南方問題

英仏蘭の東南アジア植民地には、日本がほしい石油、鉄、ゴム、錫など重要資源が山ほどある。本国支配が揺らいだスキに南方に進出し、日本の慢性的な物資不足解消を狙う。

▽畑俊六陸相に辞表を出させ、後任陸相を送らない  
ことで、7月16日米内内閣総辞職に追い込む

●後継首相推薦のイニシアティブは内大臣木戸幸一に

▽元老西園寺公望が高齢と病気を理由に辞退

▽木戸は、枢密院議長と首相経験者、内大臣による  
「重臣会議方式」を初めて採用

▽重臣会議は17日、後継に近衛を推薦

▽西園寺は「今ごろ人気で政治をやろうなんて、そ  
んな時代の遅れの考えじゃダメだね」

優柔不断、軍部に押され放しだった第一次内  
閣の実態に、西園寺の期待は冷えきっていた

……西園寺はドイツ一辺倒の風潮に危機感……

小山完吾(元辯論社長)に宛てた手紙(7月23日)で  
「時期に対し思召の段、全然御同感の至りに  
有之候。只一驚も二驚もいたし候は、独の反  
覆表裏、殊に宣伝の巧妙なるは、衆人の元よ  
り知悉致し候事と存じ候処、今に至って一向  
にこの事に注意せざる分子有之候様存ぜられ  
候。先生以て為如何」

●木戸は「天皇の相談役」として大きな地位

▽昭和天皇は、憲法遵守、「司司」の政治原理には  
生真面目なほど厳格だった

▽閣僚や、たとえ兄弟の高松宮でも、所管外のこと  
は聞かれない

その天皇にとって、政治的な大きな問題の相談  
相手、その人のことなら聞く相談相手は内大臣

●近衛の意中の外相は松岡、三国同盟も決意していた

▽1か月も前、原田熊雄(西時勲)が近衛を訪ねる  
と、「松岡の外務大臣はどうだろう」

▽国際連盟脱退の立役者松岡は、国民的な英雄

▽41歳で外務省をやめた時、「いつかは大臣にな  
って帰ってくる」外相が松岡の悲願

▽牛場友彦(近衛の秘書)に、「草履取りでもいいから、  
近衛さんに仕えさせてくれ」

近衛詣でに、女中さんは「なりたやさん」

▽15年1月 内閣参議を辞任

英米協調の米内内閣に、公然と反旗

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。昭和13年陸軍次官。「カミ  
ソリ次官」と云われる。15年第二次近衛  
内閣陸相。16年首相となり陸相、内相を  
兼任。太平洋戦争突入後は軍部独裁体  
制を敷いた。19年には参謀総長も兼ね  
たが、戦局を挽回出来ず、7月総辞職。戦  
後ピストル自殺未遂。A級戦犯で刑死

山下 奉文(やました・ともき)

明治18(1885)～昭和21(1946)高知県生  
まれ。陸軍大将。昭和16年第25軍司令官  
となりシンガポールを攻略。19年第14  
方面軍司令官。戦後マニラで刑死

畑 俊六(はた・しゅんろく)

明治12(1879)～昭和37(1962)東京生ま  
れ。元帥、陸軍大将。昭和14年陸相とな  
り、15年7月単独辞任で米内内閣を倒し  
た。20年第2総軍司令官。A級戦犯で終  
身禁固刑を受けるが、29年仮釈放

木戸 幸一(きと・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生ま  
れ。維新の元勳木戸孝允の孫。侯爵。文  
相、厚相、内相を経て昭和15年内大臣に  
就任、天皇側近の重臣として力を揮っ  
た。東条英機を首相に推薦したが、太平  
洋戦争末期には反東条となり、倒閣と  
和平工作に尽力。A級戦犯として終身  
禁固刑を受けたが、病気で仮釈放。著に  
東京裁判資料となった「木戸幸一日記」

西園寺 公望(さいおんじ・きんもち)

嘉永2(1849)～昭和15(1940)京都生ま  
れ。公爵。戊辰戦争に従軍、明治4年から  
9年間フランス留学。36年政友会総裁。  
39年、44年首相。最後の元老として後継  
首相奏請、立憲政治の維持に努める

▽松岡は近衛を訪ね、「ドイツ枢軸寄り外交」に熱弁を揮った

▽近衛は7月12日、松岡に外相就任を要請

●近衛の政治感覚は「政情安定するなら同盟も結構」

▽17日夜、大命を受けた近衛に、鈴木貞一興亜院政務部長が「三国同盟はペンディングにするか」

▽近衛は「それでは組閣出来ないかも知れぬ」

近衛のブレーン、矢部貞治東大教授によると、鈴木にこう云っている

「平沼、阿部、米内三内閣の政情不安の根本原因は三国同盟問題であった。これを推進するのは陸軍であり、陸軍の主張を容れなければ政情は安定しない。勢い三国同盟の方向を認めざるを得ないだろう。それが政治家としての常識的感覚である」

●天皇は近衛に組閣を命ずる際、「憲法遵守、英米協調」を云われなかった

▽重大な変更だが、近衛の要望が事前に木戸を通じて天皇に伝えられたためだ

▽天皇はそれでも気懸かりだったのか、「内外時局重大の際故、外務、大蔵両大臣の人選には特に慎重にするように」とだけ云われた

▽しかし近衛は、すでに松岡外相を決めていた

●近衛は、なぜそれほど松岡に執着したのか？

▽強硬外交を迫る陸軍に、英米派ではダメ

枢軸派と見られ、一見陸軍の上を行くような強硬論を口では唱えながら、「三国同盟が日米戦争を回避する道だ」と主張する松岡に魅力

▽自分は矢面に立たず「毒を以て毒を制す」式人事

●陸軍の要望で「基本国策要綱」

▽18日夜、陸軍軍務局長武藤章少将が近衛を訪ね「本案を了解の上、政策の基本とされるなら、陸軍は新内閣に対して万全の協力を惜しまない」

▽八紘＝世界のこと 一字＝一つ屋根の下に治める

▽こんな神がかった表現が、政府の公式文書に使われたのは初めてのこと

鈴木 貞一(すぎき・ていいち)

明治21(1888)～平成1(1989)千葉県生まれ。陸軍中将。興亜院政務部長を経て昭和16年国務相、企画院総裁。戦時の物資動員計画を推進。A級戦犯で終身禁固刑。31年仮釈放

矢部 貞治(やべ・ていぢ)

明治35(1902)～昭和42(1967)鳥取県生まれ。昭和14年東京帝大教授。近衛のブレーンとなり、大政翼賛運動の原案執筆。30年拓大総長。著に「近衛文麿」

大命に際して近衛の要望

近衛は矢部に云っている。「大命に際し、天皇は通常、憲法尊重、英米協調、財界に動揺を与えないことの三ヶ条の御注意を与えられる。もし大命を受ければ、恐らく同じ御言葉があると思う。自分としてはそのままでは大命を拝受するわけにはいかない。憲法の解釈が時代とともに発展しなければならないこと、また現下の国際情勢では、英米の態度に鑑み、その英米との交渉をやるためにも、ある程度独伊との関係を強化する必要もあることにつき、率直に申し上げて御許しを得たい」

…… 基本国策要綱(昭和15.7.26閣議) ……

「帝国ノ国是ハ八紘ヲ一字トスル肇国ノ大精神ニ基キ、帝国ヲ核心トシ日滿支ノ強固ナル結合ヲ根幹トスル大東亞ノ新秩序ヲ建設スルニ在リ」

武藤 章(むとう・あきら)

明治25(1892)～昭和23(1948)熊本県生まれ。陸軍中将。昭和14年軍務局長。近衛政権樹立を図り、日独伊三国同盟、日ソ中立条約、大政翼賛会結成を推進。A級戦犯となり刑死した

●19日に荻外荘で「荻窪会談」

▽内閣の重要方針は、組閣して閣議で決定するのが普通だが、外相候補松岡、陸相候補の陸軍航空総監東条中将、海相に留任予定の吉田善吾中将を集め、組閣前に決めてしまった

▽松岡起案の「四柱会議決定」を中心に話し合い、27日の政府大本営連絡会議で「世界情勢ノ推移ニ伴フ時局処理要綱」として決定

●日本の運命に関わる重大な内容を含んでいた

▽一言で云うなら「北守南進」だが、「第二次世界大戦不介入方針」の放棄だった

▽独伊との提携を強化し、日ソ国交の飛躍的改善武力南進を行い、英国一国なら戦争も辞さず対米本格的戦備に着手するという重大な決断

●「他人の禪」、ドイツ依存が前提と奉答

▽参謀次長沢田茂中将は29日、天皇に内奏

「この要綱は、ドイツがどの程度成功を収めるか否かが問題であり、ドイツの対英作戦が成功した際に、この案のように行なわれる」

▽翌日、さらに侍従武官長を通じて

「日本が自力で南方解決などは考えていない。あくまで他人の禪で相撲をとる心算である」

▽「英米可分」を前提としているが、アメリカの本格的対英援助を考えれば、極めて安易な判断

●しかも問題なのは、実質的な対米戦の準備に着手

▽この時点では、海軍はもちろん、陸軍でも対米戦の意志はほとんど持っていなかった

「対米戦の恐れのあるような南方武力行使は、絶対に行なわず」と規定すべきだった

▽このブレーキをかけなかったため、北部仏印進駐の時も、平和進駐が出来たのに武力進駐アメリカとの対立を深める結果に

●日本が太平洋戦争に至るシナリオは、荻窪会談で確認され、選択された

▽吉田海相は戦後「他愛のないフリートーキング程度のもので、三国同盟は一切話題にならなかった」

「時局処理要綱」(昭和15.7.27) —

(1)世界情勢の変局に対処し、内外の情勢を改善し、速かに支那事変の解決を促進すると共に好機を捕捉し南方問題を解決す。

(2)支那事変処理に関しては、政戦両略の総合力を之に結集、特に第三国の援蒋行為を禁絶する等、凡ゆる手段を尽して速かに重慶政権の屈伏を策す。

(3)対外施策に関しては、支那事変処理を推進すると共に、対南方問題解決を目途とし、概ね下記に依る。

①先ず対独伊ソ施策を重点とし、特に速かに独伊との政治的結束を強化し、対ソ国交の飛躍的調整を図る

②米国に対しては公正なる主張と毅然たる態度を持し、帝国の必要とする施策遂行に伴ふ已むを得ざる自然悪化は敢て之を辞せざるも、常に其の動向に留意し、我より求めて摩擦を多からしむるは之を避くる如く施策す

③仏印に対しては、援蒋行為遮断の徹底を期すると共に、速かに我軍の補給担任、軍隊通過、及飛行場使用等を容認せしめ、且帝国の必要なる資源の獲得に努む。必要により武力を行使することあり

④蘭印に対しては、暫く外交的措置に依り其の重要資源確保に努む

(4)対南方武力行使に関しては下記に準拠す。

①支那事変処理概ね終了せる場合に於ては、対南方問題解決の為内外諸般の情勢之を許す限り、好機を捕捉し武力を行使す

②支那事変の処理未だ終わらざる場合に於ては、第三国と開戦に至らざる限度に於て施策するも、内外諸般の情勢特に有利に進展するに至らば

- ▽吉田は米内、山本五十六連合艦隊司令長官同様、三国同盟に反対だったが、神経が細すぎた
- ▽近衛内閣スタートの時に、「軍事同盟でなく、政治的結束強化なら問題ない」と、どこかに遠慮

●荻窪会談を受けて「独伊枢軸強化」へ

- ▽22日の陸海軍の協議で、陸軍は軍事同盟を主張
- ▽海軍の反対で、陸軍も「政治的提携の強化に努力する。ドイツが軍事同盟を迫った場合に、初めてその可能性を考える」と妥協案に同意

原四郎大尉(鎌倉勳)は「軍事同盟と云っては海軍が同意しないので、タブーのようなものになっていた。陸軍は外務省に対しても、軍事同盟という言葉は一度も使っていない」

- ▽8月6日、陸海外事務当局の協議で決まった「強化案」は、対英政治同盟だった

「独伊の対英戦争遂行を容易にするため、日本は為し得る限り協力す」の条項で、日本が何をするのかと云うと、せいぜい東亜での英国権益の排除、示威宣伝による協力、英国植民地での独立支援運動といった程度

●これを対米軍事同盟にしたのは松岡だった

- ▽三国同盟交渉は、松岡の胸三寸で進められる
- ▽松岡は8月1日、オット独大使を招き打診
- ▽ドイツ側の反応は、最初は極めて冷やか
- 独ソ不可侵条約以来じっくりいっていなかったのに、ドイツ勝利を見て擦り寄ってくるのは何だと云う反発

●それが突然8月23日になって、リッペントロップ外相特使としてスターマーを派遣すると云ってきた

- ▽ドイツの態度急変は、何だったのか
- ドイツ側に、積極的に対日接近を図らなければならない事情が生まれた
- 日本は、それを読み取らなければならなかった

●まず第一に、英本土上陸作戦の挫折

- ▽「バトル・オブ・ブリテン」と呼ばれた英独航空決戦は、イギリス優位で進められた

対南方問題解決の為武力を行使することあり

③武力行使に当りて戦争対手を極力英国のみに局限するに努む。但し此の場合に於ても対米開戦は之を避け得ざることを以て之が準備に遺憾なきを期す

山本 五十六(やまもと・いそく)

明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。昭和12年海軍次官となり、米内海相を助けて日独伊三国同盟に反対。14年8月連合艦隊司令長官。太平洋戦争劈頭のハワイ真珠湾攻撃を立案、実行した。前線海軍基地を視察中、ソロモン諸島上空で戦死。死後元帥

オット(Eugen Ott)

1889～1976 昭和8年日独交換武官として来日。翌年大佐に進級し大使館付陸軍となり、13年大使に昇進。日独伊三国同盟を推進したが、スパイで逮捕されたゾルゲとの親交により17年解任

…… ドイツの英本土上陸作戦 ……

独ソ不可侵条約により対英仏戦に入ったヒットラーだが、その本心はもともと共産主義撲滅であり、本能寺はソ連だった。

西ヨーロッパを制覇したヒットラーは昭和15年6月19日、対英和平を提唱したがチャーチル首相に一蹴された。怒ったヒットラーは7月2日「制空権を獲得次第、英本土上陸作戦を敢行する」方針を決定、16日「シーライオン(アソ)作戦」を発令、全軍に8月半ばまでの準備完了を命じた。

制空権を目指した英独航空決戦が7月10日から始まり、ドイツは2700機を動員したが、ロールスロイスのエ

▽英海軍の存在を考えれば、制空権なしにドーバー海峡は渡れない

▽ヒットラーは8月末、上陸作戦を一時延期、9月17日には翌春までの延期を決定

▽英国史上最大の危機は去った

●ヒットラーは対ソ開戦を決意

▽7月31日、ベルヒテスガーデンの山荘に国防軍首脳を集め、「対ソ戦開始は1941年(昭和16年)5月、戦争遂行には5か月を当てる」

▽友好的に見えた独ソ関係は急速に悪化していた

▽ルーマニアの石油をめぐる対立

独ソ不可侵条約秘密議定書には、「ルーマニアのベッサラビアに対するソ連の関心を、ドイツは承認する」とあった

▽ソ連は15年6月28日、ベッサラビアに出兵すると、隣接の北部ブコヴィナも併合してしまったこの地方は欧州で石油を産出する唯一の地域

▽石油はドイツにとって、戦争遂行には欠かせない対英戦が長期戦になりそうになった時、ヒットラーはまずルーマニアの石油を確保し、それだけでは足りないので、コーカサスの石油も狙って、対ソ戦決意したのではないか

●そこへヒットラーを慌てさせた米の強硬態度

▽英国の危機は、米国の危機だった

▽米上下両院は7月11日、海軍大拡張案を可決7年間で戦艦35隻、航空母艦20隻など艦船700隻、軍用機2万5千機

▽ルーズベルト大統領は8月17日、カナダのキング首相と会談し共同防衛会議を設置

▽20日にはチャーチル首相が、西半球の海軍基地を米に提供、米から駆逐艦50隻の譲渡を発表

▽アメリカの対独参戦が次第に現実味

●米参戦を食い止める手段として、日本との軍事同盟

▽松岡が同盟交渉に入る前に、ドイツ勝利の前提、ソ連を入れて四国同盟にする構想も崩れていた

▽情報がなかったわけではない

▽東郷茂徳駐ソ大使は「独ソ悪化」を報告していた

エンジンを積んだ英新鋭戦闘機スピットファイアーは優秀だった。独戦闘機メッサーシュミットは航続距離が短いため、英本土上空まで援護出来ず、連日連夜ロンドン猛爆も行なわれたが、レーダー網を整備した英空軍は数で優る独空軍を圧倒、10月までに英機915機に対して、ドイツは倍近い1733機の損害を出した。

— ハルダー独参謀総長のメモから —

ヒットラーは、独海軍には英海軍の15%の力しかしかないこと、従って英本土上陸作戦に悲観的な見通しを述べた上で、こう語った。

「イギリスの希望は、ソ連とアメリカだ。しかし、ソ連にかけた期待が消えれば、アメリカへの期待も消えてしまう。なぜなら、ソ連の消滅は、極東での日本の価値を巨大なものに高めるからだ。アメリカは日本に対する警戒で、手いっぱいになるだろう。それ故に、ソ連はこの戦争中に打倒されねばならない」

東郷 茂徳(とうごう・しげのり)

明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。駐独、駐ソ大使を経て昭和16年東条内閣外相兼拓務相となり日米交渉に当たる。翌年大東亜省設置に反対して辞任。20年外相兼大東亜相。軍部の本土決戦論に反対、終戦をリードした。A級戦犯で禁固20年。拘禁中に病死

…… 加瀬俊一さん(外務省)の見た松岡 ……

「一個の天才で、その発想は電光のように鮮烈。早朝でも深夜でも、何か思いつくと、矢継ぎ早に指示してきたが、陣頭指揮と云うよりは単騎突出の感じだった」

▽吉田茂も近衛に手紙を書き、「スターマー急派の事実こそ、ドイツが勝敗の確信に動揺している証拠だ」と警告している

●自信家過ぎた松岡外相

▽「おれが、おれが」で押し通す

▽博覧強記、何でも知っているのも、近衛首相も他の閣僚も太刀打ち出来ない

武藤軍務局長を「属僚は黙っておれ」と一喝

▽自らの考えに酔ってしまう人で、四国同盟構想を考えた時、自分の考えとは違う情報には目もくれなかったのではないか

▽就任早々、「松岡は気が狂った」と云われるくらい、大幅な高等官人事をやった最初の外相

東郷大使ら39人に帰国命令、代わらなかったのは、重光葵駐英大使(のち)くらい

吉田も「暴挙であり、外交機能停止状態」と批判している

▽「出先は誰でもいい。外交は自分一人でやる」

▽帰国した東郷が近衛首相に「独ソ関係は変調を来しており、日ソ関係よりも悪いくらいだ」と報告すると、近衛は驚いて「初めて聞く話だ」

●陸軍中央部は16年春まで、「英本土上陸作戦」を信じていた

▽スウェーデン駐在の西村敏雄大佐は「ドイツ軍の上陸用舟艇は、上陸作戦に必要な量だけ準備されていない」

▽イギリス駐在の辰巳栄一少将も「アメリカの支援でイギリスは危機を脱し、航空戦はイギリス優位に向かっている」と報告

▽ドイツべったりの参謀本部情報部長は、ドイツに不利な情報は握り潰した

▽西村に代わった小野寺信大佐も「英本土上陸作戦はない。ドイツはむしろソ連に開戦準備中だ」

「英米の宣伝に乗せられている」と叱責電報

●スターマー特使は9月7日来日

▽日本側は、ドイツの腹を知らぬまま、ドイツをめぐる客観情勢の変化にも気付かぬまま同盟交渉へ

吉田 茂(よだ・しげる)

明治11(1878)～昭和42(1967)東京生まれ。昭和3年外務次官。駐伊、駐英大使を経て14年退官。近衛らに和平工作を働き掛け、20年憲兵隊に検挙される。戦後東久邇、幣原内閣外相。21年自由党総裁となり、首相。26年首席全権としてサンフランシスコ講和条約に調印。五次の内閣を組織、「ワンマン宰相」と云われた。38年引退後も、保守本流の元老として政界に大きな影響力。死後国葬

吉田の近衛宛て手紙

「…外交転換も大使召還をもって壮挙とするよりは暴挙となし、その後後任者の名を聞いて、ますますその感を深くし、外務省内には不安の空気に満ち、外交機能停止状態とのことにこれあり。日独軍事協定の内容は存ぜず候ども、ドイツの勝利を予想してのことなれば、その特使特派の事実こそ、彼自身、勝敗に確信動揺の証左と見るべき」

……アメリカは独ソ開戦を知っていた……

昭和15年8月末、ベルリンの米大使館商務官ウッズのところへ、一枚の映画指定席券が送られてきた。送り主は反ナチ運動をやっているドイツ人の友人で、薄暗がりの映画館でウッズの横に座ると、一枚の紙切れをポケットに滑り込ませた。

「ヒットラーの司令部で、対ソ戦の準備についての会議が開かれている。英国空襲は、ヒットラーの本当の計画と、不意にソ連を攻撃しようとする準備を隠すための煙幕だ」

報告を受けたハル國務長官は半信半疑だったが、FBIなどに調べさせた結果、裏付け情報が次々と届き、独ソ開戦を確信するようになったと云う。

●米内は、日本が近衛内閣のもと、だんだん思わぬ方向に流されていくのを感じていた

▽親しくしていた慶応義塾塾長小泉信三に

「私では三国同盟もやらず、国内改革も実行しないからと云うので、倒閣になったのです」

▽8月、日光見物に出かけた米内は、旅先から親友の荒城二郎海軍中將に手紙

「魔性の歴史は、歩一步一步と思ひもよらぬ崖っ淵に追い詰めるものだ」

●日米戦争に追い詰めた日独伊三国同盟

▽条約調印までの交渉は、ほとんど松岡一人で

ある程度知らされたのは外交顧問斎藤良衛だけ  
外務次官も事実上何も知らされなかったし、武藤ら陸軍の軍人にも関与を許さなかった

●9月6日の四相会議に「軍事同盟に関する方針案」

▽「対英政治同盟」案の大転換

▽加瀬俊一さん(松岡外相館、校記録)に

「僕の登場がもう少し早かったら、三国同盟を結ぶ必要はなかったろう。今となっては他に方法はない。だが、終局目的は日米了解の達成にある。僕には成算がある。まあ見ていたまえ」と自信満々

●「敵に弱さを見せるな」と極端な対米観

▽13歳で渡米、苦学した青年時代の留学体験

▽オレゴン州は東洋系移民が多く、人種差別による排斥運動の激しい所

▽「毅然たる態度を取らねばならぬ」が口癖

「アメリカの対日感情は極端に悪化しているから、わずかなご機嫌とりでは回復するものではない。ただ日本の毅然たる態度のみが、戦争を避ける道なのだ」

▽第一次世界大戦(1914年)の時、駐米大使館一等書記官としてドイツ最前線の米国世論に苦勞した経験

ドイツ利用の同盟構想

▽在米ドイツ人やドイツ系米人の反日キャンペーン  
日本の参戦阻止 黄色人種と同盟しているイギリスに対する反感を高める

小泉 信三(こいずみ・しんぞう)

明治21(1888)～昭和41(1966)東京生まれ。慶大教授を経て昭和8年塾長。24年から東宮参与として皇太子(暁)の教育に当たる。34年文化勲章受章

米内の荒城宛て手紙

「魔性の歴史といふものは人々の脳裡に幾千となく蜃気楼を現はし、またその部分部分を切り離して、種々にこれを配列し、また自らは姿を晦ましておいて、所謂時代政治屋を操り、一寸思案してはこの人形政治屋に狂態の踊りを踊らせる。踊らせる者は、こんな踊りこそ自分らの目的を達することの出来る、見事にしてかつ荘重なものであると思ひこんでしまふ。かくして魔性の歴史といふものは、歩一步一步と思ひもよらぬ険崖に追詰むるものである。…

然し荒れ狂ふ海が平穩にをさまるときのように、狂踊の場面から静かに醒めて来ると、ハテ、こんな積りではなかったと、驚異の目を見張るやうになって来るだらうと思ふ」

斎藤 良衛(さいとう・よしえ)

明治13(1880)～昭和31(1956)福島県生まれ。大正15年外務省通商局長。昭和2年満鉄理事。15年松岡外相の下で外務省外交顧問となり、日独伊三国同盟の締結に協力した。著に「欺かれた歴史 松岡と三国同盟の裏面」

…… 松岡の言葉 ……………

「アメリカ人に対する時は、どんなに相手が強そうに見えても、こちらに理があったら譲ってはならない。殴られたら殴り返さなければならない。一度でも威圧に屈したと見られたら、二度と頭を上げることが出来なくなる」

- ▽アメリカ世論を二分するほどの高まり
- ▽アメリカの対独参戦が2年半以上遅れたのも、親独世論にうっかり動けなかった
- ▽アメリカ世論に対するドイツの影響力の過信

●松岡の同盟構想

- ▽独伊だけでは力が足りないが、ソ連が加わることで米英との均衡 その均衡の上に日米了解も
- ▽「スターリンとじかに交渉しても、うまくいかない。仲介者が必要だ。それはヒトラーしかない。ヒトラーなら、この橋渡しが出来る」
- ▽ドイツとの同盟は、ソ連との同盟のステップに過ぎず、ソ連との同盟はアメリカとの和平の方策

●軍事同盟に反対だった海軍がなぜ同意？

- ▽海軍大臣が吉田から及川古志郎大將に
- ▽砦になるには勇気もいるが、体力も必要だった
- ▽米内と違って、次官に山本五十六もいないし、軍務局長に井上成美もいなかった
- ▽吉田は過度の心労と疲労で入院 4日辞表
- ▽及川は学者肌で温厚 強く争うのを好まない人
- ▽「原則的に同意する」 慎重を期した意味合いの留保は、松岡には通用しなかった
- ▽松岡は、四相会議の了解を得たとして交渉へ

●松岡・スターマー会談は9日夜、松岡邸で始まった

- ▽スターマーが終始強調したのは  
ドイツがこの条約に期待するのは米の参戦阻止  
対英戦に日本の軍事的援助は求めない
- ▽松岡は、軍事同盟については全く触れずに  
三国の勢力範囲を互いに認め合い、相互協力を考えている」と不満
- ▽松岡は、自分の構想通りに進むと確信
- ▽日ソ関係の調整に「ドイツは正直な仲買人の役割を演ずる用意がある」  
斎藤に「一片の疑いを持っていたドイツ仲介による日ソ国交調整に、これで大きな希望」

●わずか3日間で条約の大枠が固まった

吉田海相は幹部に訓示した

「日本海軍は、アメリカに対して一年しか戦い得ない。国策の運用に関し、海軍は固い決意を持つ必要がある。決して引きずられてはならない。ドイツ側の流す甘い情報を軽率に信じてはならない」

井上 成美(いのうえ・げいみ)

明治22(1889)～昭和50(1975)仙台市生まれ。海軍大將。昭和12年軍務局長となり、米内海相、山本次官と共に日独伊三国同盟に反対した。航空本部長、第四艦隊司令長官を経て17年海兵校長。英語教育の継続を貫き、海軍次官として米内の下で終戦工作に当たる

井上の言葉

「相手が陸軍という、陸軍第一、国策第二の存在であるのに、誰があんな定見のない及川を大臣に持ってきたのか。不謹慎極まる人事だ」

スターマーの提案

- ・ドイツはこの戦争が世界戦争に発展するのを欲せず、特にアメリカが参戦しないことを希望する。
- ・ドイツは、対英戦争に日本の軍事的援助を望まない。
- ・ドイツが日本に求めるところは日本があらゆる方法でアメリカを牽制し、その参戦を防止する役割を演ずることだ。
- ・ドイツは、日独間に了解あるいは協定を成立させ、いつでも危機の襲来に対して完全かつ効果的に備えることが、両者にとって有利であると信ずる。かくしてのみ、アメリカの参戦、または将来日本と事を構えることを防止し得る。
- ・ドイツは、アメリカを大西洋に

▽武藤軍務局長は齋藤に「同盟締結は急を要す」

「もし近衛や松岡にそれが出来ないなら、辞めてもらうより外ない。この問題の前に、近衛も松岡もあつたものではない」

▽スターマーも「交渉が長引けば秘密は自然に漏れ日ソ国交調整も出来なくなる」と早期決定を迫る

●海軍をどうやって説得するか

▽条約案第三条は、自動参戦を義務付ける

▽「欧州戦争または日支紛争に参入していない一国」がアメリカを指すのは明らか

▽海軍次官には豊田貞次郎中將(のち煇、甕根、外相)  
海軍部内では「豊田大臣、及川次官」

▽豊田は松岡を訪ね、自動参戦拒否などの修正案

▽松岡は「自動参戦の問題を条約本文から外すと、条約そのものが弱くなる」と難色

▽「条約本文の他に付属議定書と交換公文を作り、その中で参戦は各国政府の自主的判断によるという趣旨の規定をおくようにする」と妥協を求める

▽ドイツ側も海軍要望の3点を、オット大使から松岡外相宛て書簡の形で盛り込むことに同意

▽参戦には日本の判断優先 威嚇的效果は骨抜き

▽及川も「これまで海軍が反対してきた理由は全てなくなった」と同盟賛成に

●スターマーの独断、その場限りの約束だった

▽リッベントロップ外相には報告してなかった

▽対米戦は、日本の真珠湾攻撃で始まった

もしドイツが先に対米戦の火蓋を切っていたら日本に自動参戦を要求し、大問題に

●及川海相は15日の海軍首脳会議で同意を求める

▽山本だけが、同盟に強い不満と懸念を表明

▽及川は答えず、「いろいろご意見もありましょうが…」 最古参の軍事参議官大角岑生大將が「私は賛成します」と口火 バタバタと賛成に決定

●16日の臨時閣議で承認、19日の御前会議で決定

▽伏見宮軍令部総長が「日米開戦の回避に万全を期すように」との希望が出ただけ

において牽制するため全力を尽くすであろうし、また日本に対し直ちに軍事上の装備、例えば飛行機、戦車などの兵器、もし日本が希望するなら人員もつけて供給するのは勿論、極力対日援助を惜しまないであろう。

・まず日独伊三国間の約束を成立させ、しかる後にソ連に接近する方がよい、ドイツは正直な仲買人(オネスト・ブローカー)の役割を演ずる用意がある。

・スターマーの言葉は、リッベントロップの直接の言葉と受け取って差し支えない。

問題になった自動参戦条項

条約本文第三条は「三締約国中イ  
ズレカノ一國ガ現ニ欧州戦争マタハ  
日支紛争ニ参入シオラザル一國ニ依  
ツテ攻撃セラレタルトキハ、三国ハ  
アラユル政治的、経済的及ビ軍事的  
方法ニ依リ相互ニ援助スベキコトヲ  
約ス」と自動参戦になっていた。

オット大使発松岡宛て書簡

「締約国ガ条約第三条ノ意義ニ於  
テ攻撃セラレタリヤ否ヤハ、三締約  
国ノ協議ニ依リ決定セラルベキコト  
モチロントス」

山本連合艦隊司令長官の発言

「…ただし一点、心配に堪えぬところがありますので、それをお尋ねしたい。昨年八月まで私が次官を務めていた当時の企画院の物動計画によれば、その八割までが英米勢力圏の資材でまかなわれることになっていたが、今回三国同盟を結ぶとすれば、必然的にこれを失うはずであるが、その不足を補うため、どうい

- ▽近衛は豊田次官を呼んで、海軍の真意を質す
- ▽海軍は、陸軍との対立を恐れた
- ▽井上成美は「海軍は伝家の宝刀(艦隊大規模増強)を抜くべきだった」

「海相が身を引くか、入閣を拒否すれば内閣は成立せず、軍事同盟は締結出来なくなる。この伝家の宝刀の乱用は慎むべきであるが、国家の大事の際には断固として活用すべきだった。我々が三国同盟に徹底して反対し続けてこられたのも、この宝刀の切れ味を知っていたからだった」

- ▽近衛は山本を荻外荘に招き、連合艦隊司令長官として日米開戦になった場合について尋ねた

…… 山本は近衛に答えた ……

「是非やれと云われれば、やる。半年か一年の間は暴れられるが、二年、三年と長くなると全く確信は持てない。三国条約が成立する以上日米戦争を回避するように努力してほしい」

- ▽「山本の失言だった」と井上
- 「とても戦えない」と明確に否定すべきだった

- 天皇も、日米戦争にならないかと心配された
- ▽近衛に「今しばらく独ソの関係を見極めた上で、締結しても遅くはないではないか」
- ▽近衛は「この同盟は日米戦争を避けるためであって、この同盟を結ばなければ、日米戦争の危険はより大きくなるのです」
- ▽「総理は自分と苦楽を共にしてくれるか」
- 「及ばずながら誠心誠意ご奉公申し上げます」

- 同盟の有効期間 10年の三国同盟は、9月27日にベルリンの総統官邸で調印された
- ▽「今ぞ成れり『歴史の誓』  
めぐる酒盃、万歳の怒濤」(朝日)
- ▽祝賀行進 日の丸とカギ十字の小旗 歓迎一色

- 北部仏印へ武力進駐
- ▽陸軍はフランスが降伏すると、仏印の援蔭ルート遮断を申し入れ ハノイに西原一策少将の監視団

物動計画の切り替えをやられたか。  
この点を明確にし、連合艦隊司令長官としての私に安心を与えていただきたい」

### 近衛と豊田のやりとり

豊田は「海軍としては反対であることに変わりはないが、陸軍との関係、それに国内の政治情勢を考えると、海軍があくまで反対の態度を持ち続けることは不可能で、止むを得ず賛成する。それは政治的考慮からであって、純軍事的となると日米戦争となても確信は立たない」

近衛が驚いて「これは真に意外なことを承る。国内政治のことは、われわれ政治家の考えるべきことであって、海軍は政治的な考慮から離れて、純軍事的な立場から検討してほしいのだ。確信がないなら反対すべきではないか」

豊田は「今日となつては、海軍の立場も了承してほしい。ただ同意はするが、三国条約における軍事上の援助義務が発生しないよう、それだけは外交上の手段によって防止する他はない」。

### 西園寺の嘆き

「あいつらが国をどこかへ持って行ってしまふ。こっちに何の断りもなく」とうわごとように呟き、女中頭と目が合うと、「これで日本は滅びるのや。お前さんたちも、畳の上で死ねないようになってしまった」と、床の上に瞑目したまま一言も発しなかったと云う。

- ▽陸軍は、仏印を南進政策実現の基地に
- ▽松岡外相とアンリ・フランス大使の間で協定成立  
日本は仏印の領土を保全し、フランス側は日本軍の仏印への進駐を認める
- ▽大本営も平和進駐の方針を決めていた
- ▽進駐兵力、日時は、西原が現地で交渉  
ドゴール派のドクー総督に代わり難航
- ▽作戦指導にきた参謀本部作戦部長富永恭次少将  
南支那派遣軍参謀副長の佐藤賢了大佐が  
武力進駐を画策 「9月23日午前零時」を  
タイムリミットに過大な要求
- ▽平和進駐なら 金鶏勲章は貰えず軍票も使えない

- 西原が奔走し22日午後4時半、現地協定に調印
- ▽「トンキン州の飛行場使用、日本軍のトンキン州  
通過を認め、駐屯兵力は6千以下とする。日本  
軍の進駐は23日午前6時からとする」
- ▽西原は大本営に交渉成立を打電  
中国国境の第五師団先鋒部隊に連絡員を派遣  
夜8時には「武力進駐中止」の連絡を終わった
- ▽第五師団は午前零時から越境 仏印軍と戦闘に
- ▽富永と佐藤が、電報を握り潰した
- ▽陸軍軽爆撃機隊はハイフォン爆撃 15人の死者
- ▽26日未明には、西村兵団がハイフォン強行上陸
- ▽海軍護衛部隊司令官は「進駐は友好的に実施する  
ものとす」との大本営命令を示したが、西村琢磨  
少将は「陸軍の命令系統によって中止命令がこな  
ければ、強行上陸を中止するわけにはいかない」
- ▽佐藤が司令部入電の電報を独断で握り潰した

#### ●陸軍部隊の「置き去り事件」

- ▽第二支那派遣艦隊司令長官は、護衛部隊に護衛任  
務を打ち切らせ、基地に引き揚げさせた
- ▽艦隊参謀長井上成美少将は「不逞分子に協力出来  
ない」と海軍中央部に電報
- ▽西原も「統帥乱れて信を中外に失う」
- ▽陸軍も放っておけず、富永、佐藤を一時左遷
- ▽半年も経つかどうかで、富永は人事局長、次官  
佐藤は軍務課長、軍務局長  
東条の最高の腹心として権勢を揮う

#### ドゴール(Charles de Gaulle)

1890～1970 フランスの軍人、政治家。  
ドイツに降伏後ロンドンに自由フラン  
ス政府を作り、レジスタンス結集に努  
めた。1958年アルジェリア危機打開の  
ため首相となり、第五共和制を樹立し  
て初代大統領。核保有、中国承認、NA  
TO軍事機構離脱など独自外交を展開

#### 佐藤 賢了(さとう・けんりょう)

明治28(1895)～昭和50(1975)石川県生  
まれ。陸軍中将。陸軍省軍務局員の昭和  
13年、衆院国家総動員法案委員会で、質  
問する政友会代議士を大喝し、「黙れ事  
件」を起こす。17年軍務局長。A級戦犯  
で終身禁固刑。31年出所、東急管財社長

#### 井上の意見電報

「仏印交渉の経過を見ると、陸軍  
部隊は一部で勝手な行動を取り、友  
好関係を破壊に導いた有様である。  
もし万一、このよう一部の無謀分子  
の謀略のために全面的武力行使とな  
り、海軍までもその一役を買わされ  
るようになれば、日本の存亡のため  
に戦う使命を持つ皇軍の乱用となる  
べきもので、…支那方面艦隊として  
も、対支作戦に死力を尽くしている  
この際、このような戦闘に部下兵力  
をさらすようなことは実に忍びがた  
く、不逞分子が火をつけた作戦への  
協力は無意味だと考えている。

よってこの際、大本営におかれて  
も、十分に陸軍と連絡をとられ、こ  
のような無名の戦争を惹き起こさせ  
ないよう、この上とも御努力頂きたい。  
一時の陸海軍間の摩擦を避ける  
ため国の大事を誤り、支那事変処理  
をうやむやに葬られることがないよ  
う、とくに御配慮を煩わしたい」

▽日本陸軍を誤らせたのは

視野の狭い強硬論者を中央の要職に据え  
統帥の乱れを放任したこと

●敏感に反応したアメリカ

▽9月25日、蒋介石政権に2500万ドルの借款

▽26日には屑鉄の対日輸出を全面的に禁止

▽ノックス海軍長官は「三国同盟はアメリカを直接  
の対象とし、脅迫しようとしている。だが、もし相  
手が戦争を望んでいるのなら、やらせればよい」

▽三選されたルーズベルト大統領も、ラジオで国民  
に向けて「我々は参戦しないが、民主主義の大兵  
器廠とならねばならない」

▽イギリスも一時閉鎖していたビルマ・ルート再開

●日本外交に致命傷—外交暗号が解読された

▽外務省が昭和12年、在外公館に配置した「九七  
式欧文印字機」(號2597機)は、極めて機密程度  
の高い外務省自慢の暗号機械だった

▽9月25日、「暗号の天才」と云われた米陸軍通  
信隊のフリードマンが解読に成功

▽「パープル(紫)」と名付け、実物そっくりの模造  
機を8台も作った

▽これ以後アメリカ政府首脳は、日本の指導者が何  
を考え、何をしようとしているのか、出先外交機  
関とどんな交信をしているのかを正確に知る

▽日本は敗戦まで知らず、同じ暗号を使い続けた

●皇紀2600年式典と元老西園寺の死

▽11月10日、皇居前広場に4万9千人

▽「祝へ！元気に朗らかに」 市内には花電車

…… 奉祝国民歌「紀元二千六百年」 ……

桐 増田好生 楠 森義八

金鶏輝く日本の 栄ある光身に受  
けて 今こそ祝へこの朝 紀元は二  
千六百年 ああ一億の胸は鳴る

これを、たばこの値上げにひっか  
けて、「金鶏あがって15銭 栄あ  
る光30銭」の替え歌が流行った。

…… 富永の「敵前逃亡」 ……

昭和20年1月6日、米艦隊はルソン島  
のリングエン湾に侵入、艦砲射撃を始  
めた。陸軍のクラーク基地からは特攻  
隊が出撃、第四航空軍司令官の富永は  
「諸君だけを死なせるのではない。こ  
の富永も、最後の一機で、必ず突入す  
る。どうか安んじて出撃してもらいた  
い」と激励、日本刀を振り回して見送  
った。しかし12日、富嶽隊の最後の一  
機が飛び立った時も、富永はその飛行  
機には乗らなかった。

それどころか富永は17日、4機に護衛  
されて台湾の台北に飛び立った。参謀  
たちが軍司令部の台湾転出を画策し  
たり、本人もいろいろ弁解しているが、  
上級司令部の正式な命令はなかったの  
だから「敵前逃亡」、陸軍刑法の「敵  
前ナルトキハ死刑、無期若ハ五年以上  
ノ懲役マタハ禁錮ニ処ス」に該当す  
るのは明らかだ。そして陸軍は5月5日  
付で予備役に編入したが、7月には召  
集され満州の第139師団長となった。

「三国同盟は言語道断」と山本

山本は原田熊雄と会食した時、こ  
う云っている。「アメリカと戦争を  
すると云うことは、ほとんど全世界  
を相手にする積もりにならなければ  
ダメだ。ソ連と不可侵条約を結んで  
も、ソ連など当てに出来るもんじや  
ない。アメリカと戦争をしているう  
ちに、その条約を守って後ろから出  
てこないか、誰が保証するか。自分  
はもうこうなった以上、最善を尽く  
して奮闘する。そうして長門艦上で  
討死するだろう。その間に、東京あ  
たりは三度ぐらい丸焼けにされ、非  
常なみじめな目にあうだろう」

▽西園寺は11月24日、坐漁荘で91歳で亡くなった「おい、顔のヒゲがのびたから剃ってくれ」

●日本は一匹の驢馬だったのか

▽外交界の長老石井菊次郎は枢密院本会議で「歴史の教えるところでは、ドイツは最も悪しき同盟国だ」と、ドイツとの同盟に懸念を表明した

▽明治日本は、ドイツに恩恵を受け近代国家に成長  
明治憲法 政治体制 陸軍はメッケルの指導  
医学から科学技術 芸術 音楽

▽国家としてのドイツ 陰謀が至る所に影を落とす  
三国干渉 ウィルヘルム二世の「黄禍論」

▽日本に20年の安全保障と繁栄をもたらした日英同盟(1902年)にしても、ウィルヘルム二世の謀略  
強大なロシアを極東に釘づけするため

ロシアと事を構える国 日本単独では無理だから、英国との同盟で日本をその気に

▽ヒットラーも、同盟を1枚の紙切れ同様

●松岡外交は、機略に富み壮大なビジョンを持っていたが、蜃気楼を現実のものと誤り判断の基礎に

▽小村寿太郎は日英同盟を結ぶ時、電信課長の石井に英露の外交史を調べさせた

▽どちらが国として信用出来るか 歴史から検証  
▽イギリスは忠実に条約を守っているのに、ロシアは条約違反の常習犯 日英同盟が安全保障に最善

●日米開戦の日、松岡は「三国同盟は一生の不覚」

▽結核で病床にあった松岡は、斎藤に嗚咽した

「僕の外交が世界平和の樹立を目標としたことは、君も知っているとおりで、世間からは侵略の片棒担ぎのように誤解されている。三国同盟は、それでアメリカの参戦を防止し、世界戦争が起こるのを予防し、世界平和を回復し、国家を泰山の安きにおこうとしたものだ。それが事志と違い、それを思うと死んでも死にきれない。戦争だけは避けたかった」

▽16年3月12日、四国協定の夢を抱き訪欧の旅

▽ヒットラーはすでに15年12月18日

対ソ開戦準備(バルバロッサ作戦)を指令

石井 菊次郎(いしゐ・きじろう)

慶応2(1866)～昭和20(1945) 千葉県生まれ。大正4年外相。6年全権として渡米し「石井・ランシキング協定」を締結。駐仏大使を経て枢密顧問官。空襲で不明

石井の枢密院での演説

「ドイツ国あるいはその前身たるプロシア国と結んだ国で、その同盟により利益を受けたものがないことは、顕著な事実である。のみならずこれがため不慮の災難を蒙り、社稷を失うに至った国すらある。ドイツ宰相ビスマルクはかつて、国際同盟には一人の騎馬武者と一匹の驢馬とを要す。そうしてドイツ国は常に騎馬武者でなければならぬ、と云っている」

ビスマルク(Otto Bismarck)

1815～1898「鉄血宰相」と云われたドイツの政治家。プロシア首相として軍備を拡張、普墺・普仏戦争に勝利。71年ドイツを統一して首相。同盟外交を展開し、ヨーロッパの平和維持とフランスの孤立化を図る

メッケル(Klemens Meckel)

1842～1906・ドイツ軍人。明治18年少佐の時に陸軍大学校教官として来日。日本陸軍の幹部養成と軍制近代化を指導し、21年帰国。のち少将

小村 寿太郎(こむら・じゅうたろう)

安政2(1855)～明治44(1911) 宮崎県生まれ。外務次官、駐米、駐露、駐清公使を経て明治34年桂内閣外相。翌年日英同盟を結び、日露開戦外交、小村外交を展開した。38年首席全権として日露講和条約に調印。第二次桂内閣で再び外相となり、条約改正、日韓併合を行なう